

# 北川フラムの「対談」

第5回

2009年

妻有の空家プロジェクト

中村祥二 (建築家)  
鞍掛純一 (日本大学芸術学部)  
北川フラム



連続6回シリーズ

北川一空家というものは、解体するだけでもお金がかかるわけで、ほっぽつておられる。それをなんとか活かしていくだけでなくアーティストに入つて頂いて、なおかつオーナーを募集するということをやりだしている。できるだけ今ある集落そのものを意味深く使っていこう、ということで作業は始まっています。大地の芸術祭全体に関して言えば、2009年以降やり方を変えなくてはならないということは分かっています。若い人、建築家、アーティスト、デザイナーという、地域の農業をやつてきたお年寄りとかなり違う、ジヤンル世代の違う人達が関わってきました。なかなか厳しい試みですが、第2クールに入つて、実際の地域づくり、集落をどう元気に生き残して行くか、という次のステージがあります。中村一家(とうふや)自体が典型的な越後妻有地方の母屋と中門を持った民家です。今はトタン葺きですけれども、もともとは茅葺きで、

## 建築も家を彫られても負けないだけのものに戻す



左から:北川フラム、鞍掛純一、中村祥二

建築家とアーティストの協働の形  
空家プロジェクトの協働の形

小屋組の棟が深い。昔はどこにでもあつたと思われる民家で、重要文化財になるとかいう民家ではありません。始め「家を彫る」と聞かされましたが、何をするんだろうという感じで全体像がつかめない。実際にある量が彫られていく

すと、建築の方も彫られる側として、彫るという行為に対しどう考えてたらいいかということを考えるようになり、私なりの考えは、家を彫られても負けないだけの、強さというか、そういったものに戻す。こういう民家は柱も梁も大きいし、空間のボリュームが非常にあります。何をされても大丈夫なくらいしっかりとした、簡素な中の力強さと美しさ、そして大事だと思ったのは、おおらかさです。いろんな意味で建築を「きちんと作っていく」ことが答えではないかと思いました。感じた事は最初からこうなるだろうと全然読めてなく、最初行つたときの状況つていうのは、本当に「廃屋」なんです。それがお金と時間といろんなことのエネルギーが入ることによつて皆さんの目に触れても大丈夫なように「とにかく、やればできるんだ」ということが認識できました。建築をやつているプロの立場では、少しでも「こういうふうにすれば良い方向にいくだろう」という物を見通す力をつけるということが、非常に大事だなど思いました。

中村一こうなると最初からお考えでしたか。あるいはどの変遷で、いけると思われたのか。鞍掛一梁の部分を彫つていたときは床の部分に足場があつて、下の床が見えない状態で、作業的には結構劇的な感じでした。足場が取り外されて、水回りが見えて来て、従来の「家」としての機能が見えて来たときに、「これはやばいな」と。もともと壁を全部外してしまつて、構造体は僕らからみれば作品に見えるような状態だったのが、覆われて家らしく見える、そのときに段々「やばいな」と思つたわけです。プランが、実際に彫つたものを絵の中に埋め込んだものだったので、最終的にはちょうど良かつた気がしました。北川一楽しいかたちで成立していますが、最終的にこの地域の人たちは出来上がつたものを見て理解した。途中はやっぱり厳しかったと思います。出来上がつたもので、全体を納得したというか、繋がつたという感じですね。